

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要

論 文 題 目

韻律的特徴及び発話時の意識が印象に与える影響
—ビジネス場面における日本語学習者の音声の分析より—

森田 直子

2018年9月

修士論文概要書

本研究は、ビジネス場面で聞き手の印象に影響を与える日本語学習者の日本語音声の韻律的特徴と、日本語学習者に声の高さと話速に意識してもらうよう指示を与え発話してもらった場合に聞き手が受ける印象の変化を明らかにしたものである。以下、本論文の流れに沿って、概要を記述する。

第 1 章 序論

第 1 章では、筆者が本研究を行うに至った研究動機及び問題意識について述べた上で、研究目的を提示した。そして、本論文の構成を述べた。

本研究の研究動機は、学習者が日本語で話す際と母語で話す際には声の高さや発話速度等の韻律的特徴が大きく異なっており、聞き手が受け取る印象が異なると感じたことである。学習者が日本語を発話する際、相手に与えることを望んでいない印象を意図せずに与えてしまう可能性があり、学習者の社会での活躍に影響を与える可能性があると予測した。相手にプラスの印象を与える音声は、本来持つ力の発揮、周囲に認められる武器、機会獲得・活躍への貢献、印象の言語間の差異を越えるための手段としての重要な役割を担う。しかしながら、日本語教育においては、音声と印象の教育に関して、1) 日本語学習者に向けた教材の情報の矛盾、2) 日本語学習者を対象とした音声と印象に関する研究の不足、3) 発話時の意識と相手に与える印象の関連が不明、という問題点があった。

これらの問題意識に基づき、聞き手に与えたい印象に応じたポイントを押さえた日本語学習者への指導について考察することを目的とし、以下の 3 つのリサーチクエスチョン(以下、RQ)を設定した。

RQ1：日本語学習者の日本語音声において、どのような韻律的特徴の要素が聞き手の各印象項目の評価に強く影響を与えるか。

RQ2-1：日本語学習者に声の高さと話速に意識してもらうよう指示を与え発話してもらった場合、聞き手が受けた各印象項目の評価がどのように変化するか。

RQ2-2：日本語学習者に声の高さと話速に意識してもらうよう指示を与え発話してもらった場合、実際の話速と声の高さはどのように変化したか。

第 2 章 先行研究

第 2 章では、本研究と関連のある先行研究から得られた成果と問題点をまとめた上で、本研究の位置づけを述べた。最後に、本論文における用語の定義を述べた。

韻律的特徴が印象に与える影響に関する先行研究について、様々な調査が行われ、韻律的特徴が印象に影響を与えることが解明されている。しかし、先行研究で明らかになった知見はそれぞれ異なる場面・対象者・評価項目で調査が行われており、同じ韻律的特徴の要素に関する調査でも、調査を行う場面や対象によって、結果が異なっている。音声と印象の関係を明らかにする際は、その場面で必要とされる印象を選定し、場面に応じた調査を行う必要がある（内田 2009）が、日本語学習者が直面すると予測される具体的な場面において、どの韻律的特徴の要素が特に強い影響を与えるかは明らかにされていなかった。

また、日本語教育における印象に関する音声教育の先行研究について、日本語学習者が音声で表したい印象と日本語母語話者が音声から受ける印象には異なりが生じる場合がある（辻田 2015）ことが解明され、発話者と聞き手の印象の誤解を防ぐための音声教育の重要性が示唆されている。このような誤解を防ぐためにはどのような意識をすべきか学習者が知る必要があると考えられるが、従来の研究では同一人物に発話時の意識を変えるよう指示を与え、発話してもらった音声の印象の変化について調査を行った研究は管見の及ぶ限り見当たらなかった。

以上を踏まえ、先行研究の問題の所在を、以下の 2 点にまとめた。

- ①日本語学習者が直面すると予測される具体的な場面において、どの韻律的特徴の要素が特に強い影響を与えるかが不明である。
- ②実際に現場で学習者に話速や声の高さに意識して発話してもらった場合、聞き手の印象の結果に影響があるかどうか解明されていない。

そして、上記 2 点の問題の解決を目的とし、本研究を以下のように位置づけた。

- (1) 日本語学習者の機会獲得に影響を与えると予測される場面において、日本語学習者のどのような韻律的特徴がそれぞれの印象項目に強く影響を与えているかを明らかにする研究である。
- (2) 日本語学習者の発話時の意識と聞き手に与える印象の関連を明らかにし、相手にプラスの印象を与える音声表現の提案の一助となる研究である。

第 3 章 調査概要及び方法

第 3 章では、調査概要及び方法について、調査概要、調査場面、調査協力者、調査手順の順に述べた。

本研究は以下の①～⑥の手順で音声の収録、印象の数値化、結果の分析を行った。

- ①調査協力者に声の高さと話速を意識してもらうよう指示を与え、5つのパターン（指示なし、はやく、ゆっくり、高く、低く）の音声を録音する。
- ②録音した音声の印象を印象評価者に評価してもらい、印象を得点化する。
- ③音声分析ソフト（Praat）を用いて音声の解析を行い、韻律的特徴を数値化する。
- ④韻律的特徴と印象点の関係を量的に分析（散布図・相関係数の確認と重回帰分析）し、どの韻律的特徴の要素が各印象項目の得点に強く影響を与えているかを明らかにする。
- ⑤5つのパターンの音声の各印象項目の評価の得点の変化を分析（反復測定による一元配置分散分析）し、声の高さと話速を意識してもらうよう指示を与え発話してもらった場合、各パターンの音声の聞き手が受けた印象はどのように変化するかを明らかにする。
- ⑥5つのパターンの音声の韻律的特徴の関係を分析（反復測定による一元配置分散分析）し、実際の話速と声の高さはどのように変化したかを明らかにする。

なお、本研究の調査協力者は音声データ提供協力者 30 名（男性 15 名女性 15 名）、印象評価協力者 10 名であった。

第 4 章 調査結果

第 4 章では、調査結果について、RQ1、RQ2-1、RQ2-2 の分析結果の順に述べた。

RQ1 を解明するための分析の結果、聞き手の印象に影響を与える韻律的特徴について、以下の内容が明らかとなった。

- (1)「明るい」の印象には、男性・女性音声共に、「高さ」が最も強く影響している。また、女性音声において、「言い直し持続時間」、「ポーズの持続時間」も影響している。
- (2)「感じの良い」の印象には、男性・女性音声共に「話速」が最も強く影響している。また、男性音声において、「高さ」も、女性音声において、「文末『ます』の持続時間」も影響している。
- (3)「落ち着きのある」の印象には、男性・女性音声共に「話速」が最も強く影響している。また、男性・女性音声共に「文末『ます』の持続時間」、「高さ」も影響している。

- (4) 「信頼できる」の印象には、男性・女性音声共に「話速」が最も強く影響している。また、女性音声において、「文末『ます』の持続時間」も影響している。
- (5) 「仕事ができそう」の印象には、男性・女性音声共に「話速」が最も強く影響している。

RQ2-1 を解明するための分析の結果、発話時の指示による聞き手の各印象の変化について、以下の内容が明らかとなった。

- (1) 「明るい」の印象点には、声の高さに関する指示が影響を与える。
- (2) 「感じの良い」の印象点には、男性音声において、「ゆっくり」の指示と「高く」の指示がそれぞれプラスの影響を与える。また、女性音声において、「はやく」の指示がマイナスの影響を与える。
- (3) 「落ち着きのある」の印象点には、話速に関する指示が影響を与える。また、女性音声においては、声の高さに関する指示も影響を与え、「高く」よりも「低く」の指示がプラスの影響を与える。
- (4) 「信頼できる」の印象点には、話速に関する指示が影響を与える。
- (5) 「仕事ができそう」の印象点には、指示の内容が大きな影響を与えない。

RQ2-2 を解明するための分析の結果、話速と声の高さの指示を与えた場合の音声の変化について、以下の内容が明らかとなった。

- (1) 「高さ」には、声の高さに関する指示が影響を与える。
- (2) 「話速」には、「話速」の指示が影響を与える。
- (3) 「ポーズの持続時間」には、「話速」の指示が影響を与える。
- (4) 「言い直しの持続時間」には、「指示」は影響を与えない。
- (5) 「文末『ます』の持続時間（秒）」の結果に「指示」は影響を与えないが、「文末『ま』の持続時間（秒）」の結果には、「話速」の指示が影響を与える。

第 5 章 総合的考察

第 5 章では、調査結果に基づき総合的に考察を行い明らかとなった内容について述べた。

まず、聞き手の印象に強く影響を与える韻律的特徴については、5 つの印象項目の印象点にはいずれも話速または声の高さが最も強く影響することが明らかとなった。次に、発話時の指示による聞き手の各印象の変化については、「仕事ができそう」の印象には指示の

内容が大きな影響を与えないが、「感じの良い」、「落ち着いたある」、「信頼できる」、「仕事ができそう」の印象は指示の内容により印象が変化することが明らかとなった。最後に、話速と声の高さの指示を与えた場合の音声の変化については、話速と声の高さは男性・女性音声共に指示に従って変化することが明らかとなった。

第 6 章 結論

第 6 章では、RQ 及び研究目的に対する答え¹、日本語教育への示唆、今後の課題を提示した。

本研究で得られた成果に基づき、日本語教育への示唆を提示した。

まず、韻律的特徴と印象の研究に関する示唆として、3 点挙げた。1 点目は、「遅い発話が印象にプラスの影響を与える可能性」である。本調査場面では、実際の話速が遅い発話の音声及び「ゆっくり」の指示の音声が、「明るい」以外の全ての印象においてプラスに影響を与えることが明らかとなった。2 点目は、「高い発話が『明るい』の印象にプラスの影響を与える可能性」である。本調査場面では、実際の声の高さが高い発話の音声及び「高く」の指示の音声が、「明るい」の印象に有意にプラスに影響を与えることが明らかとなった。3 点目は、「男性・女性音声別に調査・研究を行う必要性」である。音声の印象を調査・研究する際は、性別による声の高さの差も考慮に入れ、男性音声と女性音声で分けて調査・研究する必要があることが示唆された。

続いて、印象に着目した音声指導に関する示唆として、5 点挙げた。1 点目は、「話速と声の高さへの意識で印象を変えられる可能性」である。日本語学習者に対して声の高さと話速に意識を変えてもらうよう指示を与えるだけで、指示に従い調整が行われ発話され、特定の印象に関しては、相手に与える印象が大きく変化した。そのため、音声に関する印象は、話速と声の高さに関する情報を学習者に提供することで、学習者自身が与えたい印象に応じて声の高さと話速に意識を向け、相手に与える印象を変えられる可能性があることが示唆された。2 点目は、「プラスの印象を与えるための情報提供素材の提案」である。研究結果より、音声に関する印象は、話速と声の高さに関する情報を学習者に提供するのみでも、学習者自身が相手に与える印象を変えられる可能性があると予測し、ビジネス場面における電話応対時に用いることが出来る、話速と声の高さの印象シートを提案した。これを用いることで、学習者が自ら与えたい印象に応じて自分の音声をデザインしていく

¹ RQ 及び研究目的に対する答えの内容について、本概要書では第 4 章を参照されたい。

際サポートができ、音声を表現していくための一つの材料となると予測される。3点目は、「遅い発話に対するイメージの転換」である。速いスピードで話す発話は上手いというイメージを持たれがちであるが、相手にプラスの印象を与える点に重点を置いた場合、速い発話が一概によいとは言えない。速く話せない場合でも相手にプラスの印象を与える可能性があることを学習者に伝えることで、話す速度が遅くない学習者も自信を持って話すことに繋がる可能性があることが示唆された。4点目は、「場面・目的に応じた情報を提示する必要性」である。同じ音声でも場面・目的によって様々な印象を与えうることを伝えた上で、本人の目的に応じた情報を提示する必要があることが示唆された。5点目は、「男性・女性音声別に情報提供・指導する必要性」である。印象に関しては、男性・女性音声に分けて解明し情報を提供することと、男性・女性音声の声の高さの違いも考慮して指導を行う必要があることが示唆された。

最後に、本研究を更に発展させるための今後の課題として、以下の2点を挙げた。

- (1) 具体的な職業を特定し、実際の職業場面で用いられる文を調査・使用し調査を行う。
- (2) 本研究結果を基にして、相手に良い印象を与えるための話し方について、日本語学習者の働く現場及び日本語教育現場で実用可能な具体的な提示法を探る。

以上、本研究では、ビジネス場面の電話対応の日本語学習者の音声において、聞き手の各印象項目の評価に強く影響を与える韻律的特徴の要素が明らかになった。また、日本語学習者に声の高さと話速に意識してもらうよう指示を与え発話してもらった場合の、聞き手が受けた各印象の変化が明らかになった。今回明らかとなった研究内容及び本研究から生まれた新たな課題の研究内容は、現場で生かされることにより、日本語学習者が相手にプラスに印象を与える音声を身につけることや自信を持つことに貢献する。それは、日本語学習者の社会での活躍に貢献し、個々人が本来持つ力を最大限発揮し活躍できる社会の構築の一助となることを期待する。

参考文献

- 内田照久・中畝菜穂子（2004）「声の高さと発話速度が話者の性格印象に与える影響」『心理学研究』75（5）、日本心理学会、pp. 397-406
- 内田照久（2006）「未知のイントネーションから想起される話者の性格印象と方言地域の特徴」『音声研究』10（3）、日本音声学会、pp. 29-42

- 内田照久 (2009) 「音声の韻律的特徴と話者のパーソナリティ印象の関係性」『音声研究』
13 (1)、日本音声学会、pp. 17-28
- 岡田陽介 (2017) 「声の高低が政党党首の印象形成に与える影響—党首討論会の音声を用いた実験研究—」『行動計量学』44 (1)、日本行動計量学会、pp. 17-25
- 荻野綱男・洪珉杓 (1992) 「日本語音声の丁寧さに関する研究」国広哲弥編『日本語イントネーションの実態と分析』平成3年度研究成果報告書、pp. 215-258
- 籠宮隆之・山住賢司・楨洋一・前川喜久雄 (2007) 「講演音声の大局的な印象に影響を与える要因」『音声研究』11 (2)、日本音声学会、pp. 65-78
- 河野俊之 (1995) 「プロンディーと丁寧表現—東京・大阪・名古屋の方言差を考慮して—」『音響学会会報』(通号 208)、日本音声学会、pp. 9-7
- 金菊熙 (2009) 「外国人訛りに対する母語話者の反応」『言語情報科学』(7)、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、pp. 109-123
- 小池真理 (2000) 「日本語母語話者が失礼と感じるのは学習者のどんな発話か—『依頼』の場面における母語話者の発話と比較して—」『北海道大学留学生センター紀要』4、北海道大学留学生センター、pp. 58-80
- 辻田沙織 (2015) 「人間関係に配慮が必要な場面における音声表現と聞き手による評価」早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文 未公刊
- 洪珉杓 (1993) 「丁寧表現における日本語音声の丁寧さの研究」『日本語音声学会会報』204、日本音声学会、pp. 13-30
- 三雲真理子・山下智香 (2011) 「発話者の音声から感じられる性格印象—声の高さについての検討—」『梅花女子大学心理こども学部紀要』(8)、梅花女子大学現代人間学部、pp. 95-112
- 森田直子 (2018) 「発話時の声の高さと話速への意識が聞き手に与える印象への影響—日本語学習者の電話応対音声の分析より—」『韓国日本学会第96回国際学術大会予稿集』韓国日本学会、pp. 41-45